

マインド

作 大橋泰彦

父 1

荒ぶる、荒ぶる気持ちを抑えて、私はただその場に立ち尽くすだけだった。数えれば、気が遠くなるほど繰り返されてきた、朝の満員電車。

父もまた、その一員に加わってから、二十三年経っている。いつもなら、記憶の片隅にも残らない、時」の狭間を切り抜けば・・・。

父 1

左の足の親指と人差し指の付け根・・・。一平方センチメートルを僅かに欠けるハイヒールの踵で、安手のシャンプーの匂いを撒き散らす、優に六十キロは下らないであろうその〇Lは、履き馴れた通勤靴の牛革一枚通して、私の左の足の親指と人差し指の付け根を、しっかり捕らえて離さなかった・・・。

ただでさえ、靴を持つ私の左手は、図らずも彼女の肥満に膨張した左尻たぶにめりこまれている。だから、いくら時間をかけ、電車の揺れと同調させて、どんなに巧みにその一平方センチメートル辺りに懸かる六十キログラムの圧力を逃れようとしても、必ずや、何の楽しみもない、脂ぎった中年サラリーマンの朝の密かなワイセツ行為と思われるに違いない。いや、すでに、このハイヒールの踵は、天地神明にかけ不可抗力であるその肥満に膨張した左尻たぶにのめりこむ私の左手を、あくまでワイセツ行為と断定し、自らの容姿も省みず、反撃を行使するものかもしれなかった！ 電車が二度ほど発着した時の人波のはずみで、踵はもう靴の革と靴下を貫き、激痛は脈拍に同期して私の脳天を襲ってくる。全身に脂汗をにじませ、歯を食いしばりながらも私は、その無実を晴らす術もなく、じっと苦痛をこらえ、ただその場に立ち尽くすだけだった！！

すべての人たちの「心」が、決してひとつではないように・・・。

父 1・2・3・4・・・荒ぶる、荒ぶる気持ちを押さえて、私はただ、その場に立ち

尽くすだけだった。

極ありきたりな家構え。

誰にでも想像できる、普通の居間に、父が会社から帰宅した。

父 1 ただいま。

母 あら、お帰りなさい。早かったのね。

父 1 ああ。

母 今日は、お誘い、なかったんですか？

父 1 なんのだい？

母 ほら、部長さんとかのお付き合いですよ。

父 1 部長と付き合う？ 母さん、そんなこと疑っているのか？ 私はね、別に責めるわけじゃないんだが、もう二十年も連れ添ってきているんだから、分かるだろ。定年間近の、しかも部長と言えば男だ。その男にだね、お父さんが不倫するわけないだろ！

母 何言ってるのよ、お父さん。誰もそんなこと言ってやしないじゃない。お酒の、誘いはなかったんですかって。

父 1 酒？ ああ、あれね。やめたよ。

母 やめたって、あの、お酒をですか？

父 1 ああ。

母 体の具合でも、悪いんですか。

父 1 何を言ってるんだい、母さん。お酒を飲むから体の具合が悪くなるんじゃないか。

母 でも、いいんですか。付き合いで飲む酒は、仕事の内だ」って、いつも言ってたじゃない。昇進にひびくんじゃないの。

父 1 昇進？ 誰のだい？

母 お父さんのですよ。

父 1 ああ、私のね。そう言えば、今日、内辞があった。

母 えっ？ お父さんにですか。

父 1 ああ。

母 昇進の内辞ですか？

父 1 そうだよ。

母 いやだ、お父さん、どうしてそれを早く言ってくれないの。おどかさうと思
って、わざとしかめっつらして帰ってきたんでしょ。

父 1 別に私は、ふだんと変わらないが。

母 電話して下さればよかったのに。そしたら、お刺身のひとつでも・・・。

父 1、壁にかかったハンガーを手に取り。

父 1 母さん、ハンガーは？

母 えっ？ ハンガーって、それですよ。

父 1 これじゃない。私が言っているのは、あの針金でできたヤツのことだ。軽く
て、質素で、丈夫で、かつ経済的な、あの針金でできたヤツのことだよ。

母 こっちにしまってますけど、お父さんは、それを使って下さい。いいで
しょそれ。今日スーパーで安かったから、買ってきたんですよ。ちょっと、
おしゃれでしょ。

父 1 ハンガーはおしゃれはしない！ 母さん、私は別に、怒って言うてるわけじ
やないんだ。誤解しないで聞いて欲しいんだが、ハンガーとは、我が家の家
構え、私が勤めている会社の規模、そして、そこにいる私の地位から、充分
想像できる、生活水準に見合った、分相応に着飾るおしゃれな服をかけるの
が、本来の使命なんだ。そのハンガーがおしゃれをして、どうする？ 最近
のファッションは、服をかけてしまえば、首しか出ない、こんなハンガーに
もおしゃれをさせるのか？ それとも、この町内会じゃ、その家の生活水準

を、ハンガーのおしゃれ具合で決めるよう、回覧板が回ったのか？

母 どうしたんですか、お父さん。ちょっと変ですよ、こんなハンガーひとつに、ムキになって……。

父1 いや、すまん。別にムキになっているわけじゃないんだ。

母 はい、これがいいんですよ。

父1 うん、これだ、ハンガーは、やっぱりこれでなくちゃ。

さつき ただいま。

母 お帰りなさい。

父1 お帰り。

さつき あら、お父さん、帰ってたの。早いのね。

父1 おまえこそ、どうしたんだい、こんな時間まで。

母 この子ね、今、スイミングスクール、通ってるの。

さつき 今日もね、先生にスジがいいって、褒められちゃった。

父1 やめなさい。

さつき え？

父1 おまえは、今の生活に、何か不満でもあるのか？

さつき え？

父1 どうしてオリンピックなんかに出たいんだ。

さつき オリンピック？ 何言ってるの、お父さん？

父1 いいかい、さつき、よく聞くんた。我が家は、お前と、母さんと、父さんというこの三人の、親子、夫婦という、太い絆で結ばれているんだ。夕餉の食卓、一家団欒、冬は鍋、夏はそうめんをすすりながら、母さんの手料理に舌つつみを打つ。お茶を飲みながら、決して尽きることのない親子の会話に時を忘れ、もう一杯いかがですか？」と、空になりかけた父さんの湯飲みにお茶を注ぐ母さんの合図で、もう、「こんな時間か」と、テレビのスイッチを入れる。NHKのニュースの時間だ。よく教育されたアナウンサーは、言葉を

選び、表情を押さえることで、誰が見ても、不快にならないよう、配慮する。どんなに凄惨な事件であっても、決してこのブラウン管からはみ出ることなく、食卓に残された一夜漬けのおしんこを楊枝でつまみながら、ニュースを話題に、我が家の平和を幸せを確かめあう。どんなに他人様の心がすさもとも、どんなに時代が暗黒を迎えようとも、断じてゆるぐことのないこの生活の、おまえは、いったい何が不満なんだ。

母 お父さん、それと、この子のスイミングスクールと、いったいどういう関係があるんですか？

父 1 何を言ってるんだ、母さん、オリンピックで異国の地に、娘を一人やって、淋しくないのか？

さつき 誰がオリンピックに出るの？

父 1 そのためにおまえは、スイミングスクールに通っているんだろ。

さつき いやだお父さん、私がオリンピックなんか出れるわけじゃない。

父 1 そうなのか、母さん。この子は、本当に、オリンピックを目指して、スイミングスクールへ通っているんじゃないんだね。

母 あたりまえでしょ、あなた。

さつき どうしちやっただの、お父さん。今日、何か変よ。

母 そうそう、さつき。ちょっとお魚屋さんに行っ、お刺身買ってきてちょうだい。

さつき どうしたの、お客さんでも来るの？

母 お父さんね、今日、会社で昇進の内辞があったんだって。

さつき わあー、ほんとに！ よかったね、お父さん。

父 1 そうか、さつきもよかったと思ってくれるか。

さつき 内辞っていうのは、もうほとんど決まってるということですよ。

母 お父さんが断らない限り、まず間違いないわ。

父 1 そう、だからね、断ったよ。

母 お客さんなんか多くなるんですよ。応接間っていつでも、こんなお茶の間
一つしかないし、困ったわあ。

父1 ね、困るだろ、だから、断ったんだ。

さつき お母さんも、いくら自分の家だからって、少しは身づくろいしないと、お父
さん、会社で恥かくわよ。

父1 そうだろ、いくらお父さんが昇進したからって、家でくつろぐこともできな
い、お前たちに、そんな思いはさせたくないからね、だから、お父さん、ち
ゃんと断ってきましたよ。

母 え？ 断ったって……。

さつき 断っちゃったの、お父さん。

父1 ああ、きっぱり言ってやりましたよ、私は、今の生活に充分満足していま
す。妻も子も、何不自由なく暮らすこの生活を、私の昇進ごときで乱すこと
は、心が痛みます。だから、この話、なかったことにして下さい。「ってね。
母 お父さん。

父1 母さんには心配かけたけど、もう大丈夫だ。これでもう定年まで、昇進の話
は絶対、来ないだろう。

さつき どうしっちゃったの、お父さん。なんで断っちゃったの？

父1 いやあ、照れるなあ。なんでなんて聞かれても。

母 どうしてなんです、あなた。

父1 お父さんも、男だからね。お前たちのことを思うと、やっぱり、ここはひと
つ、勇気をふるってだね……。母さん、言わせるなよ、恥ずかしいじゃな
いか、子供の前で。ハハハハ……。

さつき ねえねえ、お母さん。こんなこと言いたくないけど、やっぱりお父さん変だ
と思う。感じない？

母 お前もそう思う。ふつう昇進の話断ったって、家族にああもうれしそうに話
せる人間、いないわよね。

父 1 またその話かい、母さん。

母 い、いえね、私たちは別に、お父さんが決めたことに、どうのこうの言うつもりはないんですが。

父 1 もうやめようよ。夫婦や親子で、褒めたたえ合っても、言われる方は気恥ずかしいよ。お父さんは、家族のために、当然のことをしたままでなんだから．．．ハハハハ！

母 ．．．。

さつき ．．．ハハハハ．．．。

父 1 そうか、しかし、お前たちにそんなに喜んでもらえらと思わなかったよ。

母 ああ、御飯にします？

父 1 ああ、そうだね、そうしよう。

母 お風呂も、沸いてますよ。

父 1 そうか、じゃあ、風呂にしよう。

母 でも、おなかすいてるんだったら、後でも。

父 1 母さんがそう言うんだったら、後にすっか。

さつき でも、お父さん、ニュース見るんでしょ。先にお風呂入ったら。

父 1 ニュースか。まあ、さつきがそう言うんだたら．．．。

母 どっちなの。あなた。おなかすいてるの？ ニュースが見たいの？

父 1 どっちだろう。母さん、どっちがいい？

さつき お、お父さん、とにかく、お風呂入って。

父 1 ああ、そうだね。そうしよう。

父 1、風呂に去る。

母 どうしよう、さつき。お父さん、おかしくなっちゃったわ。

さつき 落ち着いて、お母さん。とにかく、目を見ても、いつものお父さんじゃない

し、何考えてるか分からないんだから、逆らわない方がいいと思うの。
でも、どうすればいいの。このままじゃ、何しでかすかわからないわ。

母 病院に連れていくのよ。電話でお医者様に相談して、お風呂から上がったら、
なんとかゴマかして連れていくのよ。

母 そうね、それしかないわね。

さつき お母さん、精神科よ。

母 いやだわ、ほんとに。精神科なんて、一生縁がないと思っていたのに。あー、
もしもし、夜分遅く申し訳ありません。わたくし、四丁目の佐藤と申しますが、
実は、わたくし共の主人がですね、ハンガーが気に入らないと申しまして。え
え、そうです。洋服をかけるあのハンガーをですね、家構えとか、会社の地位
とか回覧板とか言って、その後、今度は、スイミングスクールに通っている娘
に向かって、オリンピックだの、時代は暗黒を迎えるだのと申しまして、あげ
くの果てには、せっかくだいだいた鼻進の内辞を辞退したと、それはもう、う
れしそうに話をするんです。ええ、急になんです。今日、朝出かけるまでは、
なんともなかったんですが・・・。

父2 ただいま。

さつき えっ！

母 とにかく、どっか、おかしくなったとしか、

さつき お母さん！

母 えっ？

誰にでも想像できる普通の居間にまた、父が帰宅した。

父2 ただいま。誰に電話しているんだい？

母 い、いいえ、別に。

さつき お父さん、お風呂は？

父2 風呂か。今日も、いい汗かいてきたから、入るぞ、お父さん。

母 入るぞ、お父さん」って、あなた今、お風呂に入ってたんじゃないんですか。それに、上着を着て、ネクタイしめて、またハンガーが気に入らないんですか？

さつき お母さん、だめよ、逆らわないで。

父2 あっ。せよろける)

さつき 大丈夫、お父さん。

母 しっかりして下さいよ、お父さん。今すぐ、お医者様呼びますから。

父2 オーバーだな。大丈夫だよ。

母 でも、めまいがするんでしょ。

父2 実はね、駅前で献血やってきてね。初めてだったんで、どれくらい抜くんですか」って聞いたら、『二百ccですよ』なんて言うんだよ！ だから、お父さん 『二百ccなんてケチ臭いこと言わないで、ジャンジャン抜いて下さい』って言ってやった！

母 で、どれくらい抜いたの？

父2 ニリットル。

さつき 死んじやうじゃないの、お父さん！

母 さつき、駅前行ってすぐ返してもらってきなさい。きっと、それが原因よ。

父2 大丈夫だって、お父さんは。ちよっとめまいがするだけなんだから。あっ。せ、よろける)

母 ちっとも大丈夫じゃないじゃない。

父2 しかし、なんだね母さん。いいことをした後ってというのは、実に気持ちがいい！ そうだ、母さん、ちよっとお金をくれないか。

母 どうするんです？

父2 駅前でやっていた、カンボジア難民救済の募金に入れようと思って。

母 一銭も持ってないんですか、お金。

父2 ああ、帰りがけ、会社の前で、聖書買ってね、交通遺児育英募金したあと、渋谷で鶴折ったら、一銭も無くなっちゃってね。

母 それだけやったら、充分でしょ！

父2 いや、善意に公平が欠けては、後味が悪い！

さつき お父さん、何も、今日でなくてもいいでしょ。明日にしましょ。

父2 さつき、空腹にあえぐカンボジア難民の子供たちは、こんな私を許してくれるだろうか？

さつき 大丈夫、きっと許してくれるわよ。

父2 そうだ、すっかり忘れてた。実はね、今日は、お前たちにプレゼントがあるんだ。

母 聖書ですか？

さつき 違うわよ。赤い羽根でしょ。

父2 いや、もっと大きくて、もっと素晴らしいものだ。

さつき な、何かしらね、お母さん。

母 ほ、ほんとにね、楽しみなこと。

父2、玄関に行く。

さつき お母さん、救急車、呼びましょ！

母 そうね、それしかないわね！

父2 さあ、さつきも母さんも、喜んでおくれ。今夜は、ひさしぶりに晚餐だ！

祖母登場。

母 お母さん。

さつき おばあちゃん。

祖母 ありがとうよ。頼子さんもさつきも、わたしや、ほんとうに嬉しいよ。

母　　ごぶさたしています。

さつき　おばあちゃん、元気だった？

祖母　見ての通り、ピンピンしてるさ。この前もね、こつこつ貯めた養老年金で、エグザスの会員になってね。

母　　あなた、どうということなんです。

父2　今日、会社の帰り、ふとお母さんのことを、思い出してね。私たちの都合で、養老院に行ってもらってたけど、やっぱり、淋しいんじゃないかと思ってね。思いきって、連れて帰ってきたんだ。

母　　ずいぶん思いきましたね。

祖母　しかし、なんだね頼子さん。この子も、ちょっと見ない間に、ずいぶん性格が変わったね。言っちゃなんだけど、養老院に入れられたときは、わが子ながら、なんて冷たい子なんだろうって、ずいぶん恨んだんだよ。

母　　お母さんも、変わったと思います？

祖母　変わったさ。いつから、こんな思いやりのある子になったんだい。

母　　それが、今日、突然なんです。

父2　母さん、着がえは？

母　　あの、さつき着がえたでしょ。どこへやったんです？

さつき　お父さん、私、取ってくるわよ。

父2　いいんだよ、さつき。ちょっと風呂に入ってきますから、お母さん、ゆっくりくつろいでいて下さい。

祖母　はいはい、ありがとよ。

父2、去る。

さつき　おばあちゃん、ここへ来るまでに、お父さん、変なこと口走ってなかった？

母　　お母さん、そんなくつろいでる場合じゃないですよ。

祖母 あらあら、そうかい、ごめんなさいね。やっぱり頼子さんは反対だったんだ。あの子も、ちゃんと言ってくればよかったのに。

母 そうじゃないんですよ、お母さん。あの人、おかしいんです！

さつき おばあちゃん、お父さんね、どうかなっちゃったの！

祖母 何取り乱してるんだい。どうもなあってやしないさ。立派でしたよ。キオスクで菓子折り買ってね、日頃お世話になってますからって、乗った電車の車掌さんと運転手さんにひとつずつ。

母 そんなことまでしたんですか！

祖母 いいことじゃないか。人間、感謝の気持ちを忘れたら、おしまいだよ。

母 限度ってものがあるでしょ。毎日献血してたら、いくらレバーを食べさせたって追いつきませんよ。

父、風呂から上がって。

父 1 さあ母さん、風呂に入ったぞ。次は、御飯だったね。そうだ、さつき、ニュースを見るんだったね。

さつき お父さん、お風呂にも入ってきたの？ ずいぶん早いわね。

父 1 早かったか？ じゃあ、もう一度入ってくるか。

母 いえ、いいんですよ、別に。御飯にしましょ。

父 1 さつき。

さつき はい。

父 1 私の視線をさえぎる、この目の前の物体は一体何なんだろう。

さつき おばあちゃんよ。

父 1 学校で造ったのかい？よくできた粘土細工だ。

祖母 いやだよ、この子は。冗談までうまくなって。

父 1 うーむ、日本の学校教育もここまで進んだか。どこを押せばしゃべるんだい

祖母 何言ってるんだい、わたしや本物だよ。

父 1 さつき、この粘土細工は自分を本物だと主張しているが、本当なのかい。

さつき 覚えてないの、お父さん。おばあちゃんは今、お父さんが連れて．．．。

父 1 これは、これは、お見それしました。長い間御無沙汰しております。お体、お変わりございませんか。

祖母 いえいえ、どういたしまして。ご丁寧にも。

父 1 今日は、何のご用でしょうか。せっかくいらっしやっても、何のおもてなしもできませんが。

祖母 頼子さん！ ちょっと頼子さん！ やっぱりおかしいよ、この子！

さつき おばあちゃん！

母 何かあったの、さつき！ 大丈夫ですか、お母さん！

父 1 何を騒いでいるんだい、みんな。

祖母 そうか、わかったよ、そういうことかい。おまえ後悔しているね。みんなと示し合わせて、また、追い出そうとしているね。分かりましたよ。出て行きやいいんですよ。

父 1 何言ってるんですか、お母さん。御飯くらい食べてって下さいよ。

祖母 御飯くらいって、おまえね。

母 と、とにかく、御飯にしましょ。お母さんも、どうぞ、テーブルについて下さい。

祖母 どうしちやっただらうね、さつき。さっきまで、あんなにやさしかったのに。

父、風呂から上がって。

父 2 さあ、みんな、御飯にしようか。

母 だから私は、さつきから何度も、御飯にしましよって言うてるでしょ。

父 2 お母さんも、遠慮せず、召し上がって下さい。

祖母 はいはい、早く食べて、早く帰ってことでしょ。

母 あなたも、ひと言電話して下されば、おかずの一品も増やしたのに。

父 2 ぜいたく言っちゃいけないよ、母さん。世の中には、一日一食すら、ありつ

けない人たちが、大勢いるんだから。

父 1 母さんテレビのポリウム、少し落としてくれないか。耳もとでガンガン鳴
ってるみたいで、うるさくてしょうがない。

母 何言ってるんですか。テレビなんかついてませんよ。あなたの声が一番うる
．．．。

母は、父が二人いることにうろたえる。

さつき どうしたの、お母さん。

母 ちょっとね、疲れているみたい。もう私も年かもしれないね。

祖母 いやだよ頼子さん、年だなんて。私なんか比べりゃ、まだまだ若いんだか
ら。お前も、わけの分からないことばかりしてないで、少しは頼子さんを大
切にしてあげないと．．．。

祖母は、父が二人いることにうろたえる。

さつき おばあちゃん、大丈夫？

祖母 さつき、おばあちゃん、そろそろお迎えが来たようだ。

さつき しっかりしてよ、おばあちゃん。

父 1 どうしたんです、大丈夫ですかおばあちゃん。

さつきは、父が二人いることにうろたえる。

父 1、父 2 は、お互いに気付く。

父 1 . . . 母さん。

父 2 . . . 。

母 はい？

父 1 . . . お客さんかい？

父 2 . . . 。

母 . . . し、知りませんよ、私は。

父 1 . . . さつき。

父 2 . . . 。

さつき えっ？

父 1 . . . お友達かい？

父 2 . . . 。

さつき だ、誰のこと？ . . . 。

父 1 あの、どなたかは存じませんが、そのはしと茶碗は、私のものにして。

父 2 いえいえ、とんでもありません。母さん、お客様用のお持ちして。

父 1 奥様もご一緒ですか。

父 2 これはこれは。紹介が遅れました。家内の頼子です。

父 1 いえいえ、あらためてあなたに紹介していただかなくても、私の家内ですか。で、あなたのお連れ合いは？

父 2 ですから、家内の頼子です。

父 1 そうですか、頼子のお知り合いですか。母さん、どちらのお知り合いだい？

父 2 母さん、こちら、どこかの恵まれないお方なのかい？ だったら、どうぞ、存分にお召し上がり下さい。

父 1 私は、充分恵まれております。

父 2 遠慮なさらず、どうか召し上がって下さい。母さん、五合ほど御飯炊いて、折り詰めにして、持って帰っていただきなさい。

父 1 ですから、私は充分恵まれておりますので。

父 2 何をおっしゃいます。お宅では、おなかをすかせたお子さんが、あなたの帰りを、首を長くして、待っておられるのでしょうか。もう、何日、食べてないんですか？

父 1 さつき、いつから食べてないんだ。

さつき 今日、お昼食べたけど。

父 2 さつき、この方の前で、そんなこと自慢するもんじゃない。満足に、子供に食事を与えることもできないこの人が、不憫じゃないか。

父 1 母さん、どうして私が不憫なんでしょう。

祖母 おまえ・・・、誰と話しているんだい？

父 1 ・・・あの、失礼ですが、どこかでお会いしておりますか？

父 2 ・・・。

母 さつき、間違っていたら、正直に言うておくれ。私には、お父さんが、二人いるように見えるんだけど。

さつき お母さん、実は私も、そんな気がするんだけど、きっと何かの間違いよね、おばあちゃん。

祖母 さつきも、頼子さんも、見えるんだね。お迎えが来たんじゃないんだね。もっと長生きしていいんだね！

さつき ・・・おばあちゃん！

母 ・・・お母さん！ どういうことなのでしょう、お母さん？
祖母 分かった、頼子さん、これは、きっと新手的セールスか何かだよ。

母 まあ、押し売りですか？ 玄関の、「セールスお断り」っていう張り紙が、見えなかったんですか。帰って下さい。

父 1 誰に言ってるんだい、母さん？

母 あら、ごめんなさい、あなたでしたの。

祖母 おとなしく帰らないと、警察呼ぶよ。

父2 しっかりして下さいよ、お母さん。

祖母 なんだ、おまえだったのか。年はとりたくないね。

母 とにかく、我が家には、主人は間に合っておりますので、どうかお引き取り下さい。

父2 何言ってるんだよ、母さん。

祖母 私が、おなかを痛めた子だ。ごまかされるとでも思っているのかい！

父1 私ですよ、お母さん。

母 どうでした、お母さん、どっちがニセモノなんです？

祖母 さあ？

母 さあ、って自分の子供でしょ！

祖母 あんただって、二十年も連れ添っているんだ。分かるだろう！ さつき、おまえはどうなんだい。

さつき 私は・・・こっちがいい。

母 私は・・・、こっちがいい。

祖母 好みの問題じゃないだろう！ 親子そろって、分け合っとうするんだい。

父1 さつき、おまえ、お父さんが分からないのかい？

父2 母さん、いくら恵まれない人だからって、身を呈してまで、尽くすことはないんだぞ。

父1 あなたね、私は充分恵まれているんだ。妻も子供も、五体満足で、人様に恥じない暮らしは、ちゃんと営んでいる。

父2 あなた、人の善意を踏みにじっちゃいけません。逆手にとって、ここに居座るつもりなんですか？

父1 居座るつもりもなにも、ここは私の家だ。

父2 悲しいな、さつき。いや、この人を恨んじやいけない。私たちが恨むべきは、この人に、こんなことを言わせてしまう社会なんだ。構造社会から落ちこぼれた、哀れな犠牲者なんだよ。

父 1 私は落ちこぼれてなんかいない！ あんたこそ、何者なんだ！ さつきから、他人の家で、御飯だの、犠牲者だの。

さつき どうしよう、おばあちゃん。

母 やっぱり警察呼んだ方がいいんですかね。

祖母 なんて説明するんだい。双子の兄弟喧嘩にしか見えないよ。

父 3 ただいま。お父さん、おなかぺこぺこだよ。御飯できてるんだろ。おかずは何だい？ 駅前の商店街でね、うなぎ屋の前を通ったら、いい匂いさせてね。隣がとんかつ屋で、うまそうな見本並べてるし、向かいは焼き鳥屋で、これがもう、晩酌には持ってこい、ってヤツなんだ。とどめが、このマグロの大トロに、ケンタッキーフライドチキン、ってヤツかな。さあ、みんな、御飯にしよう。

誰にでも想像できる普通の居間に、またまた、父が帰宅した。

父 1 おい、あんたの仲間か？

父 2 知りませんよ。あなたこそ、お知り合いじゃないんですか。

父 3 母さん、御飯よそってくれ、御飯。それと山椒とトンカツソースと、七味と、醤油に、わさびってとこかな。どうしたんださつき。腹減ってないのか？ またダイエットだろ。やめろやめろ。食いたいもん食わないで、人生何か楽しいんだ。デブになって、嫁の貰い手がなくなったって、かまうもんか。一生、お父さんがうまいもの食わしてやるぞ。

父 1 あの、どちら様か存じませんが、人の家にズカズカあがりこんで、いきなりうなぎだの、トンカツだの、焼き鳥だの、ケンタッキーだの食べだすっていうのはちょっと当てつけがましいんじゃないでしょうか。我が家には、我が家の家計というものがありません、今夜はマーボー豆腐に、納豆とおしんこと、これが精いっぱい夕餉の食卓なんです。

父2 あなた、これ全部食べられるんですか。どうせ残すんだったら、折り詰めにして、この人に持たせてあげなさい。

父1 いいかげんにしろ！ 何で私が、赤の他人に夕飯のおかず恵んでもらわなきゃならないんだ。

父2 意地を張っても、家で待つお子さんの、空腹の足しにはなりませんよ。それに、まんざら、赤の他人でもないんですよ。

父1 あんたら、一体何者なんだ。人の娘つかまえて、腹すかしてるだの、デブだの。

父3 母さん、お客さんかい。

母 さあ、どうなんでしょう？

父3 まあまあ、どうぞ、一緒に飯でも食いましょう。さつき、ひとつ走り行ってお客さんの、うなぎとトンカツと、焼き鳥と、大トロと、ケンタッキー、買って来てくれ。

父1 人の娘を、勝手に使いに出すな！

父3 あれ？ 何だ、お母さんいらっしやってたんですか。どうしたんですか、養老院。毎日エンジョイしてますか、イエーッ！

祖母 いえー？ さつき、あれもお前のお父さんかい。

さつき さあ、ノリがずいぶん違うみたいだけど・・・。

父3 そうか、お母さんが連れてきたんですか、この人たち。もしかして、お母さんのナニだったりして。すみにおけないなあ、このクソババア。七十にもなって、自分の息子ぐらいの男と、いい仲ですか？

祖母 息子ですよ、私の。

父3 しかし、あんたらも変わってるね。まあ、あの人も長いことないんだし、せいぜい、楽しませてやって下さい。さあ、母さん、寝るぞ。三ヶ月ぶりだな。今夜は燃えるぞ。

父1 ちょっと待て、おい。人の家内連れて、何する気だ。それに、どうして三ヶ

月ぶりなんて知ってるんだ。頼子、お前三で割り切れる月の月末の夜の私たちの営みを、人様にふれ回っているのか！

父 2 あなたもご存じなんてすか？

父 1 あんたまで知っているのか！

父 3 お母さん何者なんです、この人たち？

祖母 おまえこそ、何者なんだい。

父 3 いやですよ、お母さん。ボケたら、何の楽しみもなくなりますよ。

祖母 おまえこそ、いつから、そんな欲ボケになったんだい。

さつき どうなってるの。

母 分かるわけないでしょ、私に！

祖母 何か見分ける方法はないのかい？

母 えーと．．．、おヘソのホクロ！

祖母 もっと、あの子しか知らないことだよ。

母 そうだ！ お父さん、今日掃除してたら、ヘンな所にお金があったんですけ

ど、何か心当たり、ありますか？

父 1 ．．．えっ！

父 3 ．．．。

父 2 ああ、これのことだろう。

父 1 ．．．おい、こら、何するんだ！

父 3 ．．．。

父 2 許してくれ、母さん。これは、おまえたちのために、使ってくれ。

母 お父さん！

父 3 何てことするんだ！ せっかく貯めこんだのに。

母 お父さん？

父 1 いや、実はね、へそくりしたはいいものの、使う勇気がなくてね、そのままにしておいたんだ。

母 お父さん . . .

祖母 分かったかい？

母 さあ？

さつき しっかりしてよ、お母さん！

母 だって、みんなお父さんのような気がするんだよ。

祖母 いっそのこと、先着順ていうのはどうだい？

父 4 ただいま。

誰にでも想像できる普通の居間に、「これでもか！」と言いたげに、父が帰宅した。

祖母 出血大サービスだね、これで打ち止めかい？

父 4 どうしたんだい、しけた顔して。

祖母 残念だったね、今日はもう締め切ったよ。

父 4 やあ、お母さん。来てたんですか。

祖母 こんなことなら、来るんじゃないかったよ。

父 4 せっかく来たんだから、ゆっくりしてって下さいよ。

さつき お父さんも、お父さんの？

父 4 何言ってるんだい、お父さんは、お父さんだよ。

母 それがね、そうでもないのよ、お父さん。

父 4 あれ、今日はずいぶんお父さんがいるんだね。私の寄り合いですか？

父 1 うちの集会所じゃないんだから、どっか他でやってくれませんか？

父 4 いいじゃないですか、たまには、賑やかで。さあ、母さん、飯にしよう。み

なさんもいっしょに召し上がりませんか。そうだ、母さん、これ。

鞆の中から包丁。

父 1 ま、待ちなさい！ 早まらずに、落ち着いて話し合おうじゃないか！

父 3 まだ、やりたいことがたくさんあるんだ、かんべんしてくれよ！

父 2 やるなら私をやりなさい！

父 4 どうしたんですかみなさん？ 母さん、今朝頼まれた包丁、買ってきたよ。

母 あ、あら、そうでしたわね。

父 1 まぎらわしい出し方するな！

祖母 どうやら、真打ち登場だね。

母 お母さんもそう思います？

祖母 うん。なんだか一番あの子らしいよ。

さつき あら？ お父さん、何が入っているの、この鞆。ずいぶん重いわよ。

父 4 ああ、それね、お金だよ。

母 どうしたんです？

父 4 会社の帰りに、ちょっと銀行に寄ってきてね。

母 おろしちゃったんですか、貯金？

父 4 いやね、せっかく包丁も買ったことだし、もらって来たんだよ。

父たち . . .

祖母 . . . もらったー！？

母・さつき . . .

父 4 うちも、もう少しお金があれば、お前たちにも楽させてやれるんじゃないか
と思っ

母 そう言えばくれるんですか、銀行って？

父 4 うん、親切だったよ。包丁見せたら、こんなにいっぱい、鞆に詰めてくれた。
それにほら、ティッシュもくれた。

父 3 あんたね、そりゃ、強盗だよ！

父 4 強盗？ なんだ、そうか強盗だったのか。やけにね、行員が青い顔してひき
つっているから、救急車呼びましようか「って心配しちゃったよ。

祖母　それで何て言ってた？

父4　もうすぐパトカーが来ますから、ついでに」って。お大事に、また来ますから」って手振ったら、貧血起こして倒れちゃいましたけどね。いつ、何があるか分からないんだから、体だけは大事にしないと。

父1　おまえたち、こっちに來なさい。いいか、こんな奴に関わったら、我が家は破滅を招くぞ。

父2　悪いことは言わないから、すぐ、返してきなさい。今なら、冗談で済むかもしれない。

父1　済むわけないだろ？　貧血起こした行員だって、今頃、似顔絵描いてるぞ。

父3　しかし、まあ、これだけ金があると、使い道に困るね。母さん何に使おう。

母　使えるわけないでしょ、そんなお金！

父3　何言ってるんだい。せっかくこの人が、私たちのために持って来たんだ。パァーッとやりたいことやって、使っちゃおうよ。

祖母　おまえ、一体、強盗してまで、何に使うつもりなんだい。

父4　何に使う？　．．．母さん、何に使えばいいんだろう？

母　あなた、どうして銀行強盗なんかしたの？

父4　どうしてなんて聞くなよ、みんなの前で。照れるじゃないか。母さんいつも言ってただろう、お金があれば、もう少し広い家に住んで、いい暮らしが出来るのに」って。そうだ！　このお金は、広い家と、いい暮らしを買うために使おう！

父3　駄目駄目！　いくらこれだけあったって、家一軒買ったら、何もできないうちに終わっちゃうぞ。それよりはこの金で食いたいもの食って、旅行でもしてだね．．．。

父4　足りないかなあ、母さん、これだけじゃ。

母　え？　まあ．．．。

父4　だったら、父さん、もう一度行って来るよ。

さつき お父さん、この時間じゃ、もう銀行閉まってるんじゃない？

父 4 なあに、さつき、大丈夫だよ。あそこの銀行は親切だったし、ちょっとお金をもらいに行くだけなんだから。おっといけない、包丁を忘れた。

父 1 ちょっと待て、おい！ 私の家から私の顔して、銀行に出かけるな！

祖母 いつからお前はそんな子になったんだい？ 私はお前をそんな子に育てた覚えはないよ！

父 4 何怒ってるんですか、お母さん。別に悪いことしたわけじゃあるまいし。

父 1 悪いことだよ、銀行強盗は！

父 2 分かりました。私に任せなさい。

さつき どうするの、お父さん。

父 2 恵まれない人たちのために、寄付して来るよ。

父 3 何するんだ、もったいない！

父 1 そんなことしたって、強盗が帳消しになるわけじゃないだろう。

父 2 私たちがどんなに後ろ指さされようと、それで一人でも多くの人が救われるんだったら、本望じゃないか、なあ、母さん。

母 何か、それも違うと思うんですけど。

父 1 いいか、母さん。あいつが、この顔して強盗やって、この顔してお金持って、この家に帰って来たんだ。きっと、もうすぐ、警察がここに押し寄せてくるぞ！

父 3 そりゃマズイな。どこかへ隠さないと。

父 4 警察？ 何しに来るんです、警察が？

祖母 捕まえに来るんだよ、あんたを！

父 4 なんで私が捕まらなきゃならないんです。あなた、代わりに捕まって下さい。
父 1 あんたが起こした不始末で、なんで私が捕まらなきゃならないんだ！

父 3 じゃあ、あなた、お願いします。

父 3 イヤだね、私は。刑務所に入ったら、タバコ一本、満足に吸えないんだ。そ

んなところに入るくらいだったら、死んだ方がマシだね。

父 4 じゃあ、あなたは？

父 2 それであなたが救われるなら、喜んで捕まりましょう。

父 1 あんたね、人が好いにも程があるぞ。こいつの身代わりであんたが捕まったってこいつは、また包丁持って、銀行に出かけちゃうぞ。

父 4 一緒に行きませんか。なあに、面倒なことはありません。こうやって包丁見せれば、みんな親切にしてくれます。母さん、台所に行って、この人に使い古しの包丁持ってきてあげなさい。

祖母 悪いことは言わないから、そのお金を持って警察に自首しておくれ。

母 そうよ。出来心なんですよ、あなた。今自首すれば、きっと刑も軽く済むはずよ。

父 1 母さん、何でこんな奴のことを、あなたなんて呼ぶんだ。強盗なんかするよ。うな奴が、お前の亭主であるわけがないだろう。こいつだけじゃない。こんなお人好しも、欲まる出しのこいつも、この家の主であるわけがないじゃないか。そうでしょ、お母さん。

祖母 分からないよ。私には、どれもわが子のように思えるし、どれも違うような気もするし。

さつき おばあちゃんもそう思う？ 私もそんな気がしてならないの。献血二リットルやるお父さんも、食べたい物欲しいだけ買って来るお父さんも、銀行強盗やるお父さんも、会社の昇進断るお父さんだって、昨日までのお父さんじゃない。

父 1 何言ってるんだ、さつき。私はお前たちの事を思っていたことなんだよ。

さつき わかってるわ、お父さん。でもね、お父さんたちだって、みんな私たちのためを思っていたことなんですよ？

父 2・3・4 . . . もちろんだとも、さつき。

母 どういうことなの、さつき。

さつき お母さん、この世界のどこに、お父さん以外に私たちのことを思ってくれる人がいるの。

祖母 さつき、じゃあ、この四人はみんなあの子だって言うのかい？

さつき きっと、そうよ。ねえ、お父さん、一体何があったの？ 今朝だって、いつもと何一つ変わらず、トースト二枚にコーヒーをお代わりし、テレビのニュースを見ながら、新聞を広げ、いつもの時間、いつもと何一つ変わらない顔で、行ってきます」と、あの玄関を出て行ったじゃない。

父3 一体何を我慢しているんだい。食べたいものを好きなだけ食べ、やりたいことをやりたいだけやって、眠りたいとき好きなだけ眠る。思うままに生きようよ。

父2 いいことだと思っているのに、何故躊躇するんだ。席ぐらい、譲ってやればいいじゃないか。道端で苦しそうにうずくまっているのに、どうして声をかけられないんだ。街へ出てみる。みんな私たちに助けを求めているじゃないか！

父4 何を恐れているんだ。善悪の区別なんて、所詮、誰かの都合のいいように作られただけじゃないか。正直な生き方、貫き通したって、みんな死ぬときは後悔しているんだぜ。

父1 一体何か不満なんだ。今の生き方の、どこに不満があるというんだ。私は、自分を不幸だと思ったことなど一度もないぞ！

父3 たった百円か二百円のために、食いたいものも食わず、我慢することがか。

父2 席を譲る勇氣もないことを、一日中後悔することがか。

父2・3・4 . . . 不幸じゃないというのか！

父1 何故、今のままじゃいけないんだ。充分じゃないか。私たちはこのままが、一番いいと思っているんだ。

父4 一度でも、疑ったことはないのか！

父3 もっと別な生き方があるんじゃないかと、思ったことはないのか！

父 1 ふざけるな！ あんたらがしたことが、別の生き方だっていうのか！見てみろ、さつきや母さんたちは、あんなに怯えているじゃないか。出て行ってくれ。これ以上、私たちの生活を壊さないでくれ。

父 4 母さん、それでいいのか。

母 ええ、警察に追われてまで、お金欲しいと思わないし。

父 4 私は、お前たちのことを思っただけなんだぞ。

父 2 出て行きましょう。この人にも、そのうち、きっと分かりますよ。

父 3 この年になって、本当はもう遅いくらいなんだけどね。

さつき だめよ、お父さん、行かないで。

祖母 止めるんじゃない、さつき、仕方ないんだよ。

外へ出ていく三人の父。

母 あなた、御飯にしましよ。

祖母 やれやれ、やっと落ち着いて、御飯がいただけね。

父 1 お母さん、実は……。

祖母 分かってますよ。これをいただいたら、又、養老院に帰りますよ。お前たちに、迷惑かけようなんて、思っちゃいないさ。

父 1 すみません。

父、はしと茶碗を持ったまま、自らの手元を見つめ、動かない……。

母 あなた、どうして召し上がらないんですか？

父 1 え？

さつき どうして食べないの？

父 1 どうしてだろう。

母 おなか、すいてないんですか？

父 1 . . . 分からない。

祖母 おまえ . . . 。

父 1 ちょっと、行ってくる。

さつき どこへ行くの。

母 あなた！

祖母 桂介！

昭和三九年

平屋の前には小さな空き地がある

父2、3、4、屋根の上から空き地を見下ろしている

女 桂介！ どこにいるの、御飯にしましよ。

子供 ワアッ！

女 あらこんな所にいたの。さあ、御飯にしましよ。

子供 つまんない。

女 どうしたの？

子供 お母さん、ちっとも驚いてくれない。きっと僕は、橋の下なんかで拾われた子供で、だから僕のこと、ちっとも可愛くないんだ、ワァー！

女 しょうがない子ね。・・桂介、どこにいるの、御飯にしましよ。

子供 ワアッ！

女 わあ、驚いた！ お母さん、心臓が止まるかと思ったわ。

子供 へへへ、そんなに驚いた。

女 驚きすぎて、お母さん、おなかすいちゃった。さあ、お家に帰って御飯にしよう。

子供 ねえねえ、お母さん、これ。

女 わあ、かわいいおうちね。桂ちゃんが一人で作ったの？

子供 そうだよ。

女 これ全部、砂で出来ているんじよ。

子供 うん。

女 上手ね、ちゃんと二階建てになっていて。あら、窓もついているのね。

子供 庭もあるんだよ。芝生があって、ここに花壇があって、ほら、ここには池も

あるんだ。

女 本当だ、ちゃんと水も張ってある。あら、何か泳いでるわね。

子供 にしきゴイだよ。

女 まあすごいね。でも、この錦鯉、足が生えているわよ。

子供 お母さん、家の中を見せてあげる。

女 そうね、じゃ、ちょっとお邪魔しましょうね。

母と子の前に、砂の家が大きく広がっていく。

子供 さ、お母さん、入って入って。

女 はいはい、お言葉に甘えて。本日は、お招きにあずかりまして、ありがとうございます。
「ございます。」

子供 まあまあ、堅いあいさつは抜きにして、どうぞご遠慮なくおさがり下さい。

女 ねえ、桂ちゃん、このドア閉まらないわよ。あら、取手がとれちゃった。

子供 だめだよ、お母さん、砂で出来ているんだから。ドアはね、こうやって、全体を持ち上げながら、ヨイショっと、ほら、こうやって、そっと閉めるんだ。

女 何だか、大変なお家ね。ごめん、この取手どうする？

子供 大丈夫、こうやってツバつけてね、ほらくつついただろ。

女 まあ、便利なこと。

子供 さあ、早くあがりなよ。

女 はいはい。

父 1 やあ、みなさん、ここでしたか。

父 3 よくわかったね、ここにいることが。

父 1 子供の頃、何かあるとよくここに登って、一人で何時間もポーツとしていたんですよね。

父 2 よく覚えてましたね。

父 1 実は、全然覚えてないんです。大人になって、おふくろがよくその話を持ちだして、ああ、そんなときもあったんだなって。

父 4 俺は、よく覚えているなあ。駄菓子屋で、どうしても欲しい物があってね、おふくろの財布から、こっそり十円玉二、三枚抜きとって、でもすぐバレちゃってね。お前はいつから泥棒になったんだい。あたしはそんな子に育てた覚えはないよ。出てお行き！」って、こっぴどく叱られて、外に放り出されてね。何処へ行くあてもないから、裏からこっそり、ここに登ってね。

父 3 ああ、あのときね。思い出したよ。御飯も食べさせてもらえず、夕焼けに染まった雲があんパンやジャムパンに見えてね、涙が出るくらい、おなががすいて、随分後悔したっけ。

父 4 俺は、もっと見つからないようにやればよかったって、後悔したよ。

父 1 覚えてないなあ。

父 2 私が覚えているのは、お祖父さんが死んだときだったなあ。寝たきりになってから、病気のお祖父さんを見るのがイヤでね、遊びに行かなくなって、結局、一年もしないうちに死んじゃったけど、もっと優しくしてあげればよかったって、後悔したよ。

父 4 ああ、あのクソジジイ。ガンコだったよなあ。曲がったことが大嫌いで、遊びに行きたび、こんなゲンコツでボカスカ、なぐられたっけ。

父 3 でも機嫌のいいときは、おこづかいくれたじやないか。覚えているだろう。父 1 さあ。

女 この廊下、ちょっと歩きづらいわね。足とられるわ。

子供 お母さん、こっちこっち。

女 はいはい。

父 1 誰ですか？

父 2 おふくろですよ。

父 3 三十年前のね。

父 1 へえーっ、若いなあ。

父 4 あたりまえだろう。三十年前からシワクチャだったら、今頃ガイコツじゃな
いか。

父 1 横にいる子供は。

父 2 わかりませんか？

父 1 えっ。

父 3 私たちだよ。

子供 ジャーン！これが、応接間。

女 まあ、りっぱな応接間なこと。ソファもあるのね。

子供 うん。

女 座っていい。

子供 う、うん、大丈夫だと思うけど。

女 やめときましようね。また、壊しちゃうといけないから。あら、あの四角い
穴は何なの？

子供 ああ、あれはね、

女 分かった。防空壕の入口ね、地下に穴が掘ってあって空襲になったら、あそ
こへ逃げこむのね。

子供 やだなあお母さん。日本はね、もう防空壕なんていらないんだ。えらい人た
ちがね 日本はもう、戦争はしません」って、世界の人たちと約束したんだ。

女 へえ、桂介はもの知りなのね。

子供 これはね、だんろって言うんだ。

女 だんろ？

子供 うん。冬、寒くなったら、この中で焚き火してね、こうやってあたるんだ。

女 あったかそうね。

父 4 戦争っていったってなあ、もの心つくかつかないかだったし。

父 3 ひもじかったからかもしれないけど、腹が減ったら減ったで、泣きわめいて

たしね。

父2 もともと、貧乏だったけど、あの頃は、日本中みんな貧乏でしたからね。

父1 あの、私には、どうしてあの頃の記憶が、何一つないんでしょう。

父2 分からないんですか？

父1 恥ずかしながら、全然……。

父3 言っておやりなさい。

父4 あなたはね、いなかったんですよ、あの頃。

子供 お母さん、こっちこっち。

女 はいはい。まあ、台所ね。でもずいぶん広いのね。

子供 お父さんが言ってたけど外国ではね、御飯はみんな台所で食べるんだって。

女 へえー、そうなの。

子供 この真ん中に、大きなテーブルおいて、椅子に座って食べるんだよ。お母さんがここで、お父さんがここ。僕は、ここいらへんかな。

女 でも桂介、このテーブル、ちょっと不便よ。

子供 どうして。

女 だって、真ん中におしんこおいても、ほら、誰も届かないもの。

子供 本当だ。

女 外国人はどうしているのかしら。

子供 分かったぞ、お母さん、きっと外国人は、長いはしを使ってるんだよ。それだったら、ほら、つまめるだろう。

女 まあ、本当ね。きっとそうよ。桂介は頭がいいのね。

子供 へへへ。

父1 長いはしねえ。つまんだはいいけど、どうやって食べるんでしょうね、ハハハ……。

父4 何か言ったか。

父1 い、いえ、私は別に……。

子供 そっと登るんだよ。この階段、まだ砂がちゃんと乾いてないんだから。

女 はいはい。まあ、ずいぶん部屋がいっぱいあるのね。

子供 うん。つきあたりがお父さんの書斎だろ、その隣がお父さんとお母さんが寝る部屋、ここがぼくの寝る部屋で、こっちはおじいちゃんと、おばあちゃんが遊びに来たときに泊まる部屋。

女 大きなお家ね。今住んでいるところに比べたら、夢みたいなお家だわ。

子供 夢じゃないよ、お母さん。お父さんが言ってたけど、これからどんどんお金持ちになっていくんだって。だから、僕が大人になる頃は、これくらいの家に住むのは、当たり前になってるんだ。それだけじゃないよ、お母さん。僕が大人になる頃は、家の中のものみんな電気で動くんだって。洗濯も、掃除も、料理も、買い出しも、お風呂も、お便所も、みんな電気がやってくれるんだ。

女 早く、そんな時代が来ればいいのにね。

子供 もうすぐだよ、お母さん。いっぱい勉強して、いっぱい働いて、僕が大きなお家を建てるから、みんなと一緒に住もうよ。ね、いいでしょ。

父 1 何もかも、手に入れたじゃないですか。小さくても、私には精一杯の家だって手に入ったじゃないですか。

父 2 あとは、老いて死を待つのみですか。

父 4 ワナにはまったゴキブリですね。粘着シートに足をとられ、身動きできず、触覚だけを動かしながら、ただ、じっと身をひそめて、死を待つのみですか。もう充分ですよ。この年になって、これ以上、もう何も望みません。

父 3 まだ、そんなことを言ってるのか、あんたは？

父 1 子供の頃の夢は、全て叶ったじゃないですか！

父 4 あんたの夢じゃないよ。あれは、私たちの夢だ！

父 2 今の生活だって、みんな、私たちが手に入れたものだ！

父 3 それをあんたは、全てとりあげて、私たちをオリの中に閉じ込めてしまった

んだ！

父 1 誰かがしなければ、いけないことでしょう。やっと手に入れた今の生活の、
一つでも失うことが、怖かったからじゃないですか。

父 3 あんたがいなくても、私たちだけで、充分やっていけたはずなんだ。

父 1 私がいなければ、今を守ることができないでしょう。

父 2 あんたは一体、何を守るつもりなんだ。

父 4 手の皮が擦り切れるまで、必死になって引いてた、私たちのロープの結び目を、心の奥深く、闇にしばらくつけ、あんた一人で、何を守るといふんだ。

父 3 両手広げ、あんた一人が体張れば、何一つ失われまいというのか。

父 2 あんたが、守ろうとすればするほど、まるで追い風にあおられる桜のように、
花びら舞い散らしているのが、見えないのか。

父 1 うそだ！ 地位も名誉も財産も、家にあるチリ一つ、何一つ、私は失っていない。

父 4 たった、たったそれだけのもののために、私たちは大切なものを手放してしまっただぞ。

父 1 私が一体何を手放したというんだ。

父 4 あんたがいなかった頃の私たちを見てみる。手にするものは何一つなくても、
心は小さな胸に抱えきれないほどの夢で、満ち溢れていたんだ。

父 2 帰る家がどんなに貧しくとも、茜色に染まる家路を、並んで帰るおふくろの
手の温もりだけで、私たちは充分満たされていたんだ。

父 3 あの頃、あれほどまでに夢見た生活とは、たったこれだけのものだったのか。
何もかも、手に入れたつもりで、あの頃の私たちの心は、すべて見失ってしまっ

まったんじゃないか。

父 3 何故夢の続きを見ることをやめてしまったんだ。

父 1 そんなもの、あるもんか。

父 2 一度でも、一度でも確かめたことがあんたにあるのか！

父2、父1に掴みかかる。

父4 やめましょう。この人には、何を言っても分かりませんよ。まだ私たちほど、つきあいが長くないんですから。

父1 . . . 帰ります。

父3 足を踏み外さないように、気をつけて、お帰りなさい。

父2 落ちても、誰も助けくれませんよ。

父3 ガンコだね。

父4 ああ、死んだ親父そっくりだ。

父1、空き地に降り立ち、立ち去ろうとするが

女 あら、お帰りなさい。

父1 . . . えっ？

子供 わあーい、お帰りなさい。

父1 . . . えっ？

女 こら、桂介、だめじゃない砂だらけの手で。お父さんのお洋服が汚れるですよ。

子供 御免なさい。

父1 お母さん、私は桂介です。

女 どうしたんです、あなた。ずいぶん疲れてるみたい。

父1 違うんですよ。お母さん、私は . . . 。

子供 ねえねえ、お父さん、見て見て。僕が作ったんだ。

父1 だから私 . . . 。

女 見てあげて下さい。この子がね、全部一人で作ったんですって。

子供 今ね、お母さんを家の中に案内していたんだ。

女 とっても大きくて、立派なおうちのよね、桂介。

子供 うん。

女 広い台所があって、テーブルがあって、壁いっぱい広がる大きな窓から差し込む日差しのなかで、御飯を食べるのよね。

子供 そうさ、長いのはしを使ってね。

女 それに、だんろだっけ？

子供 うん。だんろもあるんだ。お父さん言ってただろ。外国じゃ、家の中に焚き火をする所があって、冬でも一日中、ポカポカあったかいんだって。

父 1 . . .これが、いったい何だっというんだ。

女 あなた。

子供 お父さん。

父 1 こんなものに、誰が住むんだ。

女 どうしたのあなた。

父 1 応接間だって？ どこにあるんだ？ 書斎だって？

女 あなた、この子がせっかく作ったのに。可哀そうじゃない。

父 1 どこにあるんだ、一体。えっ？ 壁と屋根があるだけじゃないか。ウソつくんじゃない、よく見てみる。ほら、家の中はカラッポだよ。何も無い、がらんどうの家じゃないか！

女 やめて下さい、あなた！

父、子供が作った砂の家を手でこわす。

父は、ひとつかみの砂で、心の空洞を埋めようとしている。

父 1 こんなものを作って、何かうれしいんだ。雨が降れば崩れて、元の砂に還ってしまふ、こんな家のどこが夢なんだ、言ってみろ。足をかければ、ひとつたまりもない、こんな砂の家さえあれば、何もなくても、充分満たされるほど、

幸せだとも言うのか！

やめて下さい、あなた！

父 1 . . . えっ？

女 ごめんね、桂介。お父さん、きっと疲れてるのよ。だから、もう泣かないで、許してあげて。

父 1 . . . すみません、許して下さい。

女 どうしたのあなた、誰に頭下げてるの？

父 1 . . . 。

子供 . . . お父さん、嘘じゃないよね。

父 1 . . . えっ？

子供 僕が大人になる頃は、戦争もなくて、いいお薬がいっぱいできるから、お父さんもお母さんも、みんな、長生きできるんだよね。

父 1 . . . ああ、そうだよ。

子供 僕が大人になる頃は、日本人もみんなお金持ちだから、食べるものも、着るものも、好きなだけ、自由に買えるようになるんだよね！

父 1 . . . ああ、そうだよ。

子供 僕が大人になる頃は、みんな、大きなうちに住んでいて、お父さんやお母さんとずっと一緒に、そこで暮らしていけるんだよね！！

父 1 ああ、そうだよ！

女 桂介、早く大人になってね。お母さん、楽しみに待ってるから。さあ、御飯にしましょ。

子供 お父さん、僕ね、お父さんみたいな大人になりたい。

父 1 . . . えっ？

子供 男らしくて、たくましくて、我慢強くて、何があっても、お父さんへこたれないだろう。泣かないだろう。そんなお父さんを、僕は世界中の誰よりも、尊敬しているんだ。だから、僕は、お父さんみたいな大人になるんだ！

決して誰にも解くことのできないこのパドックスに、しかし背を向けてばかりはいられないに、違いない。

父 4 少しはこたえたんですね。

父 3 嫌だよ、またあんな暗闇に押しやられるのは。

父 2 いくらガンコっていても、根はいい人なんだから。

父 1 まんまとはめられましたね。

父 2 何のことですか。

父 3 さあ、何のことでしょうね。

父 4 いやだなあ、ワルは私だけにしておいて下さい。

父 1 . . . だから、何が変わるのかと聞かれても、今の私には、何も答えることができません。

父 4 もし、誰かが時間の狭間を見たことがあるというのなら、私はきっと心の狭間を垣間見たのでしょう。

父 3 もし、誰かが神の声を聞いたことがあるというのなら、私はきっと自身の警告を耳にしたのでしよう。

父 2 もし、誰かが差し伸べられた手に一度でも救われたことがあるというのなら、私はきっと私自身に手を差し伸べたのでしよう。

父 1 でも、子供と同じ夢を抱えこむには、もう私は、年をとりすぎています。

父 4 だから、私はきっと、明日もいつもと何も変わらない時を刻むに、違いありません。

父 1 現にほら、左の足の親指と人差し指の付け根、. . .

父 1 . 2 . 3 . 4 . . . 荒ぶる、荒ぶる気持ちを押さえて。

やがて父はまた、ひとつの心に支配されていく。

父 1

ただいま。

母

あら、お帰りなさい。早かったのね。

父

ああ。それより母さん・・腹が減ったよ。

完<

